言語生活

藤原与一

○

人間が言語を以て生活する実態を「言語生活」と見る。

その言語生活は、じつに千種万様であろう。これを、個人の言語生活と集団の言語生活とに立てわけて考えてみることもできる。もっとも、個人の言語生活とは言うものの、じっさいには、これも対人的行為であり、したがってそこには社会——人間集団——がある。集団の言語生活と言うものも、じっさいには、個人々々の言語行為の寄りあいにほかならない。このようではあるが、「言語生活」を、個人現象として注目しうる場合と、集団現象として注目しうる場合とがあることは、たしかであろう。学者が一巻の独創書をあらわすのは、個人の言語生活として注目すべきものであり、方言という状況は、言語生活の集団面について考えることのできるものである。通語・隠語も、共通語も、集団現象である。

○

言語学は言語を研究する。国語学は、日本語という言語を国語として研究する。言語の研究が言語生活の研究であるなら、言語生活に関する「学界の展望」は、今、国語学上では、日本語に関する研究の全部に及ばなくてはならない。

が、本誌に分類された「言語生活」という項目は、そこまでを意味してはいまい。旧来、「言語生活」というものを、かなり特定的な項目にしてきたところには、学界の言語生活観——という研究態度——の一特色があろう。

○

「言語生活」を、人びとの言語による生活とか、言語を以てする生活とか、言語の生活とか言いかえてみる。要するに、眼前の（過去の時代のではなく、現代の）、個人とか集団とか言うまでもないことのようにさえ思える、渾然とした、ことばの生活の一大様相を、「言語生活」と言ってみる。

広い社会について、現代の言語生活の様相を、それとして大観してみる時、私どもは、種々の傾向や特色を指摘することができる。（個人のがわからも集団のがわからも。）いわゆる言語生活に関して

は、今日、私などは、その言語生活の「研究」の展望以前に、その言語生活そのものの展望の興味をおぼえる。——じつは、その言語生活の研究が、まだ、ぶ厚いものにはなっていないのではないか。（ぶ厚くなれば、「言語生活」の研究と「言語」の研究とが、合致してくると思う。）

○

「言語生活」そのものの展望にしたがえば、一つに、近来つづく週刊誌ばやりの全国的様相は、刮目すべきものである。週刊誌群が、いかに多く広く強く、国民の言語生活をうごかしていることか。この現象は、日本の言語生活文化史上、特筆すべきものにちがいない。このことを考察する「言語生活」研究が、今後、大いに出てよいと思う。——（「言語生活」そのものの展望は、いきおい、言語生活の研究の展望になる。）

二つに、広告の、広い範囲と多様な方法とにわたっての、近来つづくはなばなしさが、言語生活の一大様相として注目される。広告の技術は日進月歩である。広告言語は、視聴覚の各般の方便を借りて立体化せしめられつつある。文章・句法・語句の創作は、日々にはげしくなってきている。この面で、話しことば・書きことばともに、日本語ははげしく流動せしめられつつあるとも言えようか。この事態を、日本語——国語——の生態として、総合的に観察する研究が、出てよいと思う。言語生活のこの方面の研究のために、たとえば文化人類学的知見を活用することなど、今後の一課題ではないか。一科の社会心理学からしても、こういう広告百般の言語生活が、総括的に、おもしろくとらえられるのだと思う。民俗学というものも、私はこれを「生活」の学問と考える。生活の学問である民俗学は、広告の一大生活を、学の独自の眼でとらえていくことができよう。過去の、あるいは、あり来たった民俗資材を対象とするとともに、その継起の事象、現実の広告民俗をも見ることにすれば、おもしろい研究ができよう。

三つに、近来の機械開発による言語生活の革新面が、ことに注目される。電子頭脳と呼ばれるような機械の進歩につれて、私どもの言語生活も、口話面・書記面ともに、大きくうごきつつある。この方面の文法研究や機械的処理の研究は、日進月歩であろう。ここには、また、人間の思考の生活の将来を、人間論的な立場で論究する作業も出てよい。

四つとして、なお、注目すべきものいくつかを、合わせかかげる。「都会の言語生活と田舎の言語生活とのへだたり・差異」、「東京の言語生活とジャーナリズムとのむすびつき」、「ジャーナリストの言語生活の形式化機械化」、「商業主義出版などの盛行による一般言語生活の浮薄化」、「ジャーナリズムなどの流行語製作と、大衆の無思考的言語生活」、「男性の言語生活と女性の言語生活とのまじわり」、「言語生活上の、はなはだしい世代変化」、「若い世代の言語生活の中の、ある虚無性」、「政治の言語生活の中の不誠実」、「国際言語生活の障害」。これらは、大局的に、統合的に、観察考究されるべきものであろう。これからの、しかも切実な研究テーマがここにあると言ってよい。

言語を研究する学徒の関心の展開がおそくて、人はまだ、右のような状勢に対処し得ていないのか。学徒が、独創的な研究にはげめばはげむほど、特殊に沈潜することが深く、したがって、統合的大

局的な研究の協同動作などにははいりにくい。学者の言語生活の孤立性は、つねに指摘することができる。その、孤立的なところが、学者の言語生活の深層でもあろう。そうした学者の言語生活の所産としての研究著書に対する、いわゆる書評は、学者の言語生活に関する一種の研究であるとも見ることができる。

さて、右の、深層の言語生活に対して、表層的な言語生活がある。近来は、いわゆる学術論文や著書にも、種々の発表様式・表現様式（あるいは表現工夫）が見られるようになった。人は、その発表内容の表現のために、さまざまの演出をしてもいる。その技をきそうかのような言語生活のあるのを、私どもは注目せざるを得ないのである。その表層的な事態に対する建設的な批評——研究——の出ることが望まれる。

○

つぎに、言語生活についての、学究の「研究」の展望におよぼう。

日常の言語生活、——一般人の毎日の言語生活にとって、もっとも必要なのは、創造性ではないか。この創造性への思慮を、大衆の生活の知恵とするために、学者の研究がいる。これに関して注目される一つの学問は、一般意味論である。森岡健二氏には、『人間を支配することばのマジック——ゼネラルセマンティックス——』（四十一年四月至文堂）がある。

広い視圏での言語生活の交流・通行を、学者はつねに問題にしなくてはなるまい。この点で、国弘正雄氏ほか三氏の訳出された、ホールという人の『沈黙のことば』（四十二年十一月南雲堂）は、一つの興味ぶかい参考書であった。

四十一年内発行の、「話し方」「書き方」の参考文献に関しては、『国語年鑑昭和四十二年版』を参照せられたい。それに「言語技術」という見出しもある。「言語技術」書の出ることは、依然としてさかんなものがある。が、「何なにのしかた」の「かた」を内面化することがたいせつなのではなかろうか。

筆者は、そこを主眼にして、小冊『ことばの生活のために』（四十年一月講談社）を世に問うてみた。この年十月、樺島忠夫氏が『文章工学——表現の科学——』（三省堂）を発表されたのは、意義深いことであった。樺島氏は、文章製作に関して、じつに明晰な論理整然とした説明をしていられる。筆者など、理念・精神は氏の同じものを持つと自覚しつつも、その方法の合理的なのには、推服の情を禁じ得ないのである。書く生活の合理的推進を研究して、氏はなお多くの発言・活動を示していられる。

山内得立先生『意味の形而上学』（四十二年四月岩波書店）をここにあげることは、突然であろうか。そうではないと思う。言語生活の合理的な推進と内面化とのさいに肝要なのは、意味の真義の理解である。この時、右のような沈潜追求の書は、私どもの大きい支えになる。言語生活の社会的習慣の中にあって、ことばに無自覚・無反省となりがちのわれわれを、この書はむちうってくれる。

社会の言語生活を広く見て、その習慣の中から、興味ぶかいトピックを多くとりあげたものとしては、吉田金彦氏の『ことばのカルテ　ふだん語百話』（四十二年十一月三省堂）がある。この種のものも、私どもの日常言語生活を、いろいろに反省させてくれる。

方言社会を見て、その特色ある言語生活を描くことにつとめたも

のとしては、一つ、佐藤義人氏の『駿河岡部の方言と風物』（四十二年九月大学書林）をあげることができる。

○

書物のうち、辞典・辞書の類は、直接、人びとの言語生活の座右をうるおすものとされる。その新版を見たものに、久松潜一氏ほか三氏監修、桐原徳重氏ら編の『国語辞典』（四十一年十一月講談社）がある。三省堂編修所編の『新国語中辞典』（四十二年一月三省堂）がある。日本放送協会編『日本語発音アクセント辞典』（四十一年八月日本放送出版協会）がある。話すことばの生活のためには、右の『発音アクセント辞典』が好伴侶となろう。

文字生活をとりあつかったものとしては、国立国語研究所報告29『戦後の国民各層の文字生活』（四十一年三月）がある。「言語生活」の研究では、国立国語研究所が、大きな役わりをはたしてきている。

国立国語研究所の大久保愛氏は、『幼児言語の発達』（四十二年十一月東京堂出版）を世に問われた。

特に「敬語」に関しては、大石初太郎氏の『正しい敬語』（四十一年六月大泉書店）があり、辻村敏樹氏の『現代の敬語』（四十二年十一月共文社）がある。

向井克胤氏は、「日常言語生活における伝達上の障壁」との副題を設けられた『ことばの壁』をあらわされた。（四十二年七月桜楓社）

国立国語研究所編、毎年の『国語年鑑』（秀英出版）は、日本現代の言語生活を大観させてくれて、有益である。

○

つぎには、雑誌の類を問題にしよう。

「言語生活」研究の専門誌は『言語生活』（筑摩書房）である。創刊以来、特集形態を追ってきた本誌の発展は、高く評価されてよい。昭和四十一・四十二年もまた、「特集」の連続であった。〃このつぎは何の特集だろう？〃と、人にたえず興味をいだかせてきた編修の努力は、たっとぶべきものである。テーマを求めて、つねに新鮮であろうとする本誌には、「言語生活」の総合的研究・特定的研究への熱意がみとめられる。各巻の内容としては、「目」「耳」のようなものもある。この種の記事も貴重である。「録音器」の記事もまた貴重である。「ことばのくずかご」も、私はいつも愛読している。雑誌『言語生活』が、ジャーナリズムとアカデミズムとのよい調和を目ざして、いよいよ発展していくことを祈ってやまない。

ついで問題にしうるのが、『ことばの宇宙』である。これは一九六六年の六月に創刊された。（ラボ教育センター）（テック言語教育事業グループ）本誌は、「ことばの宇宙」という構想のもとに、斬新な意図をつぎつぎにうち出し、言語の科学を新しく広く建設していこうとしている。そのいとなみの中には、創造的な「言語生活」への大きな関心がある。私どもは、この新雑誌を手にすることによって、毎月、私どもの言語生活の改善、意欲的な改革を考えていくことができる。今後いよいよ、宇宙次元の雑誌企画が展開されるならば、新時代に生きようとする人びとは、その前むきの言語生活を、ここで大いにきたえていくことができよう。

いま一つの「言語生活」誌と見てよいものに、『放送文化』（日本

放送出版協会）がある。これも、前誌と同じく「特集」誌である。放送方面に関しての「言語生活」研究が、毎号、多彩に盛られている。

以上の諸雑誌が、みな「特集」方式であるのは、注目に価する。このような編修意図の中には、まず開拓精神があろう。態度は前むき、眼はつねに展望のかまえにあろう。読者は、これらの雑誌によって、文明機械器具利用の応用面へも、関連諸多科学の花園へも、しぜんに導入されていく。

○

一項として、別に記すべきは、NHK総合放送文化研究所、放送用語研究部の研究活動である。一つには、『放送用語の研究』がある。（四十一年四十二年とも、『文研月報』よりの抜刷りを発行している。）二つには、つぎにかかげるような研究報告がある。

話しことばと放送　――放送のことば　第3回アンケート結果報告――　竹田スエ　（四十一年八月）

放送用語発音基準の問題　――発音のゆれのいろいろ――　西谷博信　（四十一年八月）

放送用語研究の一方法　菅野　謙　（四十一年八月）

発音しにくいことばの音声要因　――全国アナウンサー対象のアンケート調査の分析――　菅野　謙　早田輝洋　（四十二年六月）

「放送用語」を研究する右の機関の、地道な活動は、現代言語生活に対する、一方からの研究活動として、推重すべきものと考えられる。多くの点に関して、教えられることの多い研究が、しばしば発表されている。ねがわしいのは、この種の用語研究がますますダイナミックなものになること、かつ、研究成果がどしどしと現場に生かされることである。

○

ここで、書物出版の全般に関しても、「言語生活」という面から、一こと、ふれておきたい。商業主義的出版の隆盛のもとでは、諸般の全集ものや、いわゆるベスト・セラーの類が、ことに読む言語生活の人びとの目をうばいがちである。このところに、いわば没個性的な言語生活の、浅く流れる傾向のあるのを、時流として注目せざるを得ない。

○

最後の一項として、国語審議会の活動をとりあげる。――それを、「言語生活」に関する研究・討論の活動と見てである。四十三年三月二十日の『朝日新聞』には、

第八期の同審議会は、五月末に二年間の任期切れとなるが、文相への答申が期待できそうにないので、文部省は、当用漢字の再検討などを次期審議会に引継ごうと考えている。

とあった。この会の活動の、「言語生活」の書記面に関する研究も、成果をあげることがむずかしいようである。国語論議の言語生活の、合理的発展ということは、望んで得にくいもののようである。

○

この「展望」記録のむすびとして述べたいことは、つぎのとおり

である。

□「言語生活」の研究に、よこに見る研究と、たてに見る研究とがある。

□「言語生活」という一大総合体をとらえる、研究の総合的方法が、考えられなくてはならない。

□言語生活の研究と言語の研究との相即一致が望ましい。

□所詮、研究の中心にすえられるべきは、「人間」という理念であろう。

□研究者の、人間学的な世界観と、言語感覚ないし言語生活感覚とが入用である。

―広島大学文学部教授―